

高知県方言における推量表現「ニカーランについて」

安岡 浩二

はじめに

本稿は、高知県方言における推量表現の一つであるニカーランについて考察するものである。『高知県方言辞典』を見ると、「にかーらん 連語 ……のようだ。……であろう。……にちがいない。(後略)」とあり、高知県西南部(大月町、土佐清水市、三原村)の方言辞典である『渭南の言葉』では、「にかーらん ようである 似ている(後略)」とある。土居(1958)や吉田(1982)にも記述があり、ニカーランに推量と比況の用法があることが示されている⁽¹⁾。その他、質問調査によってニカーランの用法について考察した高木(2001)などもあるが、実例に基づく研究は少ない。

また、全国分布を見ると『方言文法全国地図』(以下、GAJ) 241図「降りそうだ」、GAJ 242図「良さそうだ」、GAJ 243〜246図「雨だそうだ」、GAJ 247〜249図「高いそうだ」、GAJ 250〜252図「いたそうだ」などにニカーラン

が認められ、高知県にしか分布していない。管見では高知県以外で使用されている報告はなく⁽²⁾、高知県独特のものである可能性が高い。高知県方言の特徴を表す表現形式の一つであるといえる。

一 調査の概要

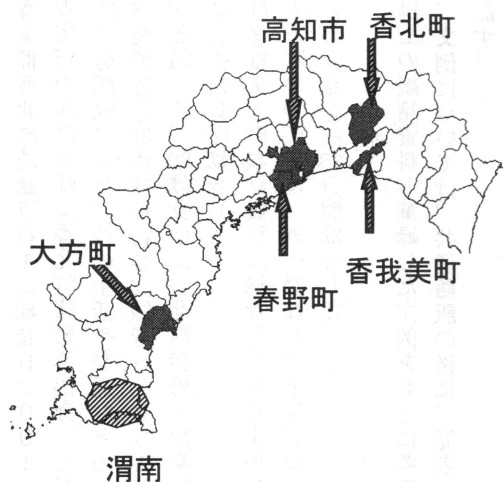
一、一 調査地

調査は高知市、吾川郡春野町、香美郡香北町、香美郡香我美町、幡多郡大方町で行った。高知市、香北町、香我美町は高知県の東言葉の地域であり、大方町は西言葉の地域に属する。調査地を図1・1に示す。

高知市は高知県の県庁所在地であり、高知県の総人口の約40%が集中し、県下のさまざまな市町村出身者が暮らしている。春野町は高知市に隣接し、のどかな風景の残る園芸の町である。香北町は高知市から車で40分ほど東に位置し、物部川沿いに、いくつかの集落が点在し、徳島県境へ

つながっていく。香我美町は筆者の郷里であり、みかん栽培が盛んである。大方町は高知県方言で、西言葉の地域に区分され、高知市周辺の東言葉とアクセントの面などで異なる部分があるとされるが、土居（1958）には「本質的には異質な言葉でもないと思われる」（「土佐言葉区画論」及び「土佐言葉区画図」参照）とあり、本稿でのニカランの考察において東言葉と西言葉の差は、特に問題にならないと考える。

図1-1 調査地（高知県地図）



一・二 資料

基本資料には談話資料及び、筆録した文例を用いた。筆者は、数年前から談話録音に取り組んできた。実際に使用される方言を資料として用いたいと考え、自然傍受法を基本とし、筆録よりも正確に方言を記録できる録音に重点を置いた。談話はMDレコーダーで録音し、談話資料としてまとめた。文字化した談話資料の概要を以下に示す。

- ① 吾川郡春野町談話資料（録音日1999年8月11日）
60代女性（春野町在住、外住歴なし）と40代女性（春野町出身、香我美町在住）の自然会話を約6分間録音した。
- ② 高知市談話資料1（録音日2000年4月6日）
70代男性（高知市在住、徴兵による外住歴あり）と50代男性（高知市出身・在住、外住歴不明）、及び、筆者の自然会話を約25分間録音した。
- ③ 高知市談話資料2（録音日2000年10月29日）
高知市の20〜40代女性数名の自然会話を約40分間録音した。年齢は筆者の推定である。
- ④ 高知市談話資料3（録音日2001年11月23日）
高知市で30代（推測）女性1名、20代女性3名、20代男性2名（うち1人は安芸郡田野町出身）の自然会話を約64分間録音した。

⑤ 香美郡香北町談話資料1（録音日2001年7月14日）

香北町の80歳女性（香北町猪野々出身）と筆者との会話を約55分間録音した。昔の生活や交通などの話を聞いた。

⑥ 香美郡香北町談話資料2（録音日2001年9月14日）

⑤と同じく、80歳女性（香北町猪野々出身）と筆者との会話を約74分間録音した。

⑦ 幡多郡大方町談話資料（録音日2001年9月6日）

大方町の90歳男性（外住歴なし）と筆者ほか数名の聞き手との会話を約35分間録音した。

以上の談話資料と筆録した文例をもとに考察を行う。なお、文例については、共通語訳の後に、話者の出身と年齢を記す。

二 ニカーランの用法

まず、ニカーランの用法を見ていく。先述のように、先行研究によって、ニカーランに推量、比況などの用法があることが、一定部分明らかにされている。ここでは、実例に基づきながら、その用法を整理していく。

二・一 推量

先行研究でも示されるように、（1）～（4）のような推量の用法が認められた。

（1）ギャクニカーラン

【相談したいと電話をしてきた人に対して】逆のようだ（こちらが相談したい）／高知市50代男↓
60代男

（2）コリヤー リョーシュー オクッタニカーラン
ミヨーニ

【領収書の記録を見ながら】これは領収書を送ったようだ、どうも／高知市70代男

（3）ソロソロ チカズイテ キタニカーラン

（振向くと間近に人がいた）ゆつくりゆつくり近づいてきていたようだ／安芸市田野町22男↓
25男

（4）モット コノ ホーガ オイシーニカーラン

【羊羹をたべながら】もつとこの（羊羹の）ほうがおいしいようだ／香我美町90代女（つぶやきの文例）

これらの用法は、話者がある物事の様子・状態（様態）を不確実に表していると考えられる。先行研究の推量にあたるが、単純な推量ではなく様態的であることが注目される。様態と推量との区別は難しいが、本稿ではこの用法を推量として扱う。

二・二 伝聞推量

二、一であげた推量の文例(1)～(4)は視覚や味覚など、話者の直接的な感覚に基づく判断である。これに対して(5)～(6)はある物事に関して、伝え聞いた情報から判断したものであり、間接的な判断による表現である。これらを伝聞推量とする。

(5) マイニチニモ ヨバンニカーラン

【テレビからの情報】(納豆は体によいが)毎日(食べる)には及ばない(時々食べればよい)らしい／香我美町60代女↓20代男

(6) ドライノ ホーガ モット ヒエルミタイニカーラン

【テレビからの情報】冷房よりもドライのほうがもっと冷えるらしい／香我美町50代女↓50代男

この場合、既に伝え聞いた情報自体にある程度の結論が含まれることが多い。例えば(5)では「(納豆は体によいが)毎日(食べる)には及ばない」とほぼ同様の情報がテレビから得られたものと考えられる。横井(1981)では、

発話者が第三者の判断を受け入れた結果なされる客観的立場(傍観者的立場)にたった表現であると考えられる。

としている。これは伝聞推量の用法に、ある部分はあてはまるが、比況・推量に比べるとより間接的な判断という程度であり、傍観者的立場というほど間接的ではない。

ここでGAJ²⁴³～²⁴⁶図「天気予報ではあしたは雨だそうだ」(図2・1)GAJ²⁴⁷～²⁴⁹図「あの人の話では、東京はずいぶん物価が高いそうだ」(図2・2)GAJ²⁵⁰～²⁵²図「昔、昔、あの山に鬼がいたそうだ」(図2・3)の各略図を示す。これらの伝聞的な質問文でニカーランが回答されている

また、図2・1ではニカーランが6地点、図2・2では5地点で使用されている。一方、図2・3では2地点しか分布していない。それに代わり、ツ類が増えている。

これは、図2・3の質問文の「昔、昔、あの山に鬼がいたそうだ」は内容が現実的でないために、他のものよりも間接的な表現になる。このため、図2・3ではニカーランが避けられたのではないか。つまり、伝聞推量の用法は、直接的な感覚からの判断(比況・推量)に比べて、より間接的な判断を表すものと考えられる。また、さらに間接的な表現(例えば引用的な表現)になるとツ、トが用いられる。

図 2・1 G A J 243 ~ 246 図 (高知県部分)
「天気予報ではあしたは雨だそうだ」

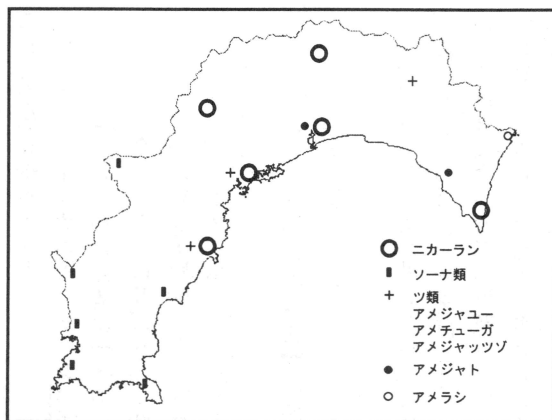


図 2・2 G A J 247 ~ 249 図 (高知県部分)
「あの人の話では、東京はずいぶん物価が高いそうだ」

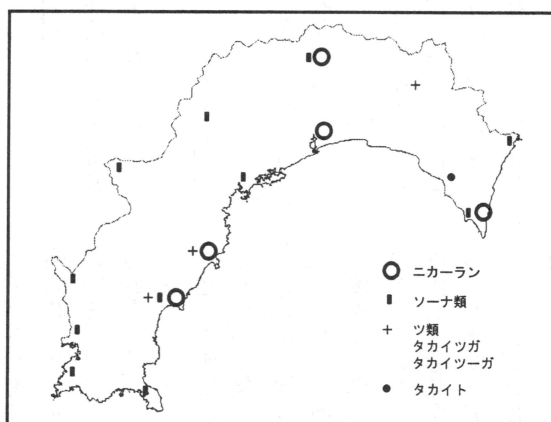
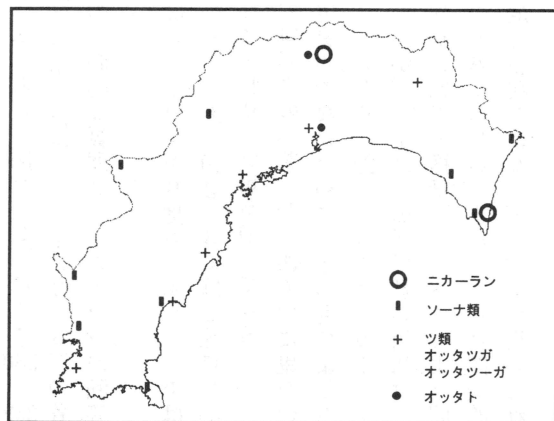


図 2・3 G A J 250 ~ 252 図 (高知県部分)
「昔、昔、あの山に鬼がいたそうだ」



二・三 比況

次に、問題となるのは、比況の用法である。比況の文例は談話資料には1例も認められず、筆録によって1例だけ得ることができた。

(7) コレ フィットニカーランデネー

これ(コルトという車)は(姿が)フィット(という車)のようだよね/土佐市20代女↓筆者
推量や伝聞推量に比べて使用頻度は低い。また、文献から比況と判断できる(8)〜(12)の文例をあげる。

(8) そんなことをして居ると馬鹿にかーらんぞね。

(土井1935)

(9) マツコト アホーニカーラン(山崎1961)

(10) イマカラ カンガエタラ アホーニ カーラン

いまから考えたらばかみたいだ。『全国方言資料』³⁾

(11) アシガ コーリニカーラン(土居1958)

(12) マツコト フジサンニカーラン(吉田1982)

先行研究で比況の用法があげられているにもかかわらず、具体的な用例は(8)〜(10)のように「アホ」「馬鹿」につくものや、(11)「氷ニカーラン」、(12)「富士山ニカーラン」しか見出せない。より多様な文例があげられてもよいはずであるが、典型的な文例しか認められない。

(12)の「フジサンニカーラン」という文例はGAJの調査文例にもあり(質問番号177/未地図化)、高知県部分

のデータを表2-1としてまとめる。また、筆者が地図化したものを図2-4として示す。

図2-4 GAJ「富士山のようだ」質問番号177(高知県部分)

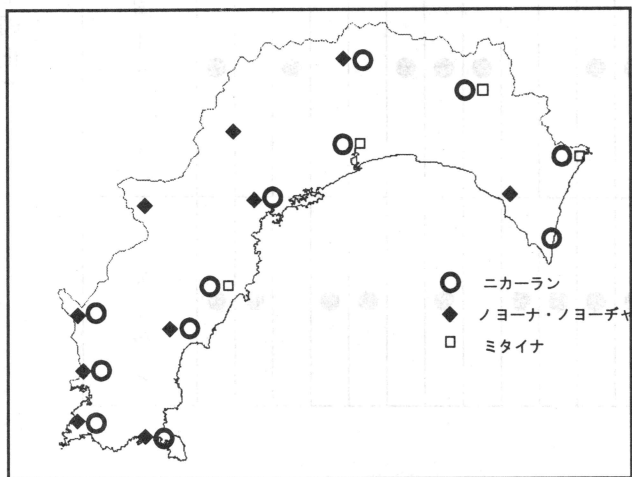


表 2-1 G A J 「富士山のようだ」(質問番号 177 / 未地図化)

調査地点 (高知県部分)		ミタイナ	ノヨーナ (ヂャ)	ニカーラン
① 土佐郡土佐町南泉		●	●	●
② 香美郡香北町猪野々				●
③ 吾川郡吾川村大崎		●		
④ 高知市弥生町	●			●
⑤ 安芸郡東洋町白浜	●			●
⑥ 高岡郡檮原町四万川坪野田		●		
⑦ 須崎市西古市町				●
⑧ 安芸郡田野町		●		
⑨ 高岡郡窪川町七里甲	●			●
⑩ 室戸市室津稲石				●
⑪ 幡多郡西土佐村大宮		●		●
⑫ 宿毛市土居下		●		●
⑬ 幡多郡大月町弘見		●		●
⑭ 幡多郡大方町田野浦		●		●
⑮ 土佐清水市栄町		●		●
合計	4	10	12	

図2・4によるとニカーランが最も多く用いられている。しかし、併用が多い(12地点中11地点が併用)。類似した意味の語(ミタイナ・ヨーナ)と併用されていることが注目される。

高木(2001)では比況の用法について、「ただ、今回の調査の結果では二人のインフォーマントの回答にあまりにも差があったため、ニカーラン使用の明確な条件は見出せなかった。」とある(インフォーマントは69歳男性(1931生)と53歳女性(1947生))。したがって、安定性にかける表現ともいえる。

使用頻度も低いこともあり、比況の用法は現在では衰退しつつある用法と考えられる。GAJの調査結果(表2・1)のように類似した語が存在することが衰退の原因と考えられる。用法が類似するミタイナやヨーナなどの語形が存在するために、ニカーランが衰退したとしても支障はきたさなかったであろう。

また、接続面に注目すると、得られた文例(推量、伝聞推量、比況)は述部(接続助詞で導かれる修飾節中の述部も含む)で用いられており、連体・連用修飾の形をとらないという制約もある。これは(15)・(18)にあげられる比況・様態を表すヨーナやミタイナとは異なるところである(15)(17)は連体修飾、(16)(18)連用修飾の用法)。

このような制約も用法を衰退させた理由と考えられる。

- (15) アタマノ ウエデ クダケタヨーナ オトガ
シタジャー ユワーネー(香北町80女↓筆者)
本当に、頭の上で砕けたような音がしたなんて言うわね

- (16) アノ サカモトリヨーマラーガ イーヨッタヨ
ーニ イヤー エーケンド (香北町80女↓筆者)
あの坂本竜馬なんかが、言ったように言えば良いけれど

- (17) イノチガケミタイナモンヨネ(大方町90男)
命がけみたいなのよね

(18) イツカイ カエローミタイニ シヨッタデネー
一回帰ろうみたいにしていたよね(高知市20代女)
なお、得られた文例から、用法の比較をまとめると、表2・2のようになり、例示、様態ではニカーランは認められず、ミタイナ、ヨーナが用いられる。次に、比況では、連用・連体修飾でミタイナ、ヨーナが用いられ、述部のみで若干ニカーランが用いられる。推量では述部ではニカーラン、ミタイナが用いられ、ヨーナは用いられない。最後に、伝聞推量ではニカーランしか用いられない。つまり、ニカーランとヨーナ・ミタイナには相補的な関係が成り立ち、お互いの用法を補いあっていることがわかる。

表 2-2 ニカーラン・ミタイナ・ヨーナの用法のまとめ

伝聞推量		推量		比況		例示・様態		
述部	連用・連体修飾	述部	連用・連体修飾	述部	連用・連体修飾	述部	連用・連体修飾	
×	×	×	×	●	●	●	●	ヨーナ
×	×	●	●	●	●	●	●	ミタイナ
●	×	●	×	△	×	×	×	ニカーラン

三 ニカーランの出自

ニカーランの出自は、古典語の「にかあらむ」(に・か・あら・む(ん))や、「に変わらぬ」などの説がある⁽⁵⁾。前者を出自とすれば、推量の助動詞「む」、係助詞「か」との関連が考えられ、後者とすれば、「変わる」という動詞との関連が考えられる。両者は意味・品詞が異なるだけに、どちらを出自とするかによって推定される語史は大きく異なってくる。ここでは、両者について検証を行い、比較検討していく。

三 一 にかあらん

まず、「にかあらむ(ん)」(以下、「にかあらむ」)の出自の可能性を考える。『高知県方言辞典』や、山崎(1961)では「にかあらむ」を出自としている。しかし、これらの先行研究では用例に基づく考察は行われていない。そこで、本稿では古典の用例に基づき考察を進める。

調査には『万葉集』『土佐日記』『古今和歌集』『枕草子』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『宇治拾遺物語』『天草版平家物語』『虎明本狂言』『徒然草』『好色一代女』の文献を用いた。用例については、特に注記がないものは『日本古典文学大系』からのものであり、検索には国文学研究資料館『日本古典文学本文データベース』を用いた。

『天草版平家物語』は江口(1986)から用例を得た。

各文献における「にかあらむ」の用例を分析すると、大きく推量・推定と疑問の二つに分類された。推量・推定の用法には(19)～(21)が認められた。

(19) 間無く戀ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる『万葉集』621

(20) 霜ぐもり爲とにかあらむひさかたの夜わたる月の見えなく思へば『万葉集』1083

(21) 吾妹子に戀ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮寝の安けくもなき『万葉集』2806

(22) 鳥が音のきこゆる海に高山を障になして沖つ藻を枕になし蛾羽の衣だに着ずに鯨魚取り海の濱邊にうらもなく宿れる人は母父に愛子にかあらむ

若草の妻かありけむ(後略)『万葉集』3336

(23) 秋の夜を長みにかあらむ何そこば眠の寝らえぬも獨り寝ればか『万葉集』3684

(24) 家人の齋へにかあらむ平けく船出はしぬと親に申さね『万葉集』4409

(25) なほあげながら歸るを待つに、君たちの聲にて、「荒田に生ふるとみ草の花」とうたひたる、このたびはいますこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらん、すぐくしうさしあゆみて往ぬるもあれば、わらふを、「しばしや。」など、さ、夜を捨てていそぎ給ふ」とあり」などいへば、心地など

やあしからん、倒れぬばかり、もし人などや追ひて捕ふると見ゆるまで、まどひ出づるもあめり。

『枕草子』77段

(26) なほめでたきこと、臨時の祭ばかりのことにあらむ。『枕草子』142段

『万葉集』で(19)と(24)の6例と『枕草子』の2例(25)(26)が認められた。この推量・推定の用法はニカーラシとの関係を感じさせる。

しかし『万葉集』以降、推量・推定の用法は『枕草子』の(25)(26)しか認められない。これにかわり、疑問の用法が盛んになる。疑問の文例は(27)と(32)が認められた。

(27) 十五日、節供ふしぐいありす多、かゆの木ひきかくして、家の御達・女房などのうかがふを、うたれじと用意して、つねにうしろを心づかひしたる、けしきもいとをかしきに、いかにしたるにかあらん、うちあてたるは、いみじう興ありてうちわらひたるはいとはええし。『枕草子』3段

(28) あまたある中に、これは、おくれじと、まどはるゝもしるく、いかなるにかあらん、足手など、たゞすくみにすくみて、たえいるやうにす。

『蜻蛉日記』

(29) いかにおぼさるゝにかあらん、心ぼそきことを

の給はせて、「猶世のなかにありはつまじきにや」とあれば『和泉式部日記』

(30) いとあさましうねたかりけるわざかな、誰がしたるにかあらん、仁和寺の僧正のにや、と思へど、よにかかることのたまはじ、藤大納言ぞ彼の院の別當におはせしかば、そのし給へることなめり、

『枕草子』138段

(31) その夜おはしまして、例の物はかなき御物がたりさせ給(ひ)ても、「かしこにいてたてまつりてのち、まろがほかにもゆき、法師にもなりなどして、見えたてまつらずは、本意なくやおぼされん」と心ぼそくの給(ふ)に、いかにおぼしなりぬるにかあらん、又さやうの事も出で來ぬべきにやと思(ふ)に、『和泉式部日記』

(32) 水のほとりを、廿あまり、三十ばかりの女、中ゆひてあゆみゆくが、石橋をふみ返して過ぎぬるあとに、ふみ返されたる橋のしたに、まだらなる蛇の、きりゝとしてあたれば、「石の下に蛇のありける」といふほどに、此ふみ返したる女のしりに立ちて、ゆらゆらとこの蛇の行ば、しりなる女の見るに、あやしくて、いかに思ひて行にかあらん。踏み出だされるを悪しと思て、それが報答せんと思にや。『宇治拾遺物語』巻4ー5

これら疑問の用法は、疑問詞（点線部）を伴い、挿入句的に用いられている。これは『万葉集』などの推量・推定の用法には認められなかった用いられ方である。この変化は、「にかあらむ」に内在する係助詞「か」の変化と関連している。阪倉（1960）では、平安時代の「か」について、

その第一は、右に問題にした「……カ——」という、疑問詞なくして文中に力を用いる形式である。これは、上代においても、散文にはその例が見あたらず、和歌のみに用いられたものと想像されるが、この時代になると、散文はもちろん、和歌に用いられることも非常に稀で、たとえば、『古今集』に四首、源氏物語の和歌には、わずかに三首、という有様である。

と述べている。阪倉氏のいう「……カ——」の形式には、疑問詞を伴わない「にかあらむ」も含まれることになる。係助詞「か」の用法の変化に従い「にかあらむ」の用法も変化したと考えられる。つまり、『万葉集』（6例）と『枕草子』（2例）以降、鎌倉時代までの作品には疑問の用法しか現れないことになる。推量・推定と疑問の用法について、各文献中に認められる用例数をまとめると表3-1になる。

表3-1 「にかあらむ」作品別の用法と使用数

	上代	平安				鎌倉
作品名	万葉集	古今和歌集	蜻蛉日記	枕草子	和泉式部日記	宇治拾遺物語
疑問	0	1	19	19	2	19
推量・推定	6	0	0	2	0	0
合計	6	1	19	21	2	19

ただし、室町時代について、阪倉（1960）によると、一体、「……カ——」の形は、平安時代において、すではなはだ稀であったこと、前述の通りであるが、それが、室町時代に、『後ノアタナカナラウズラウ』（史記抄十一）、『衣ヲ賊ニカトラレウズラウ』（『六物図

抄』『死にかせうずらう』(『室町時代小唄集』)の
とくに、かなり用いられているのは、一見不思議であ
る。

とあり、再び「……カー」の用法が現れると指摘され
ており、注意が必要である。

室町時代の文献として、当時の口語を反映しているとみ
られる『天草版平家物語』をみると、(33)と(35)の疑
問詞を伴わず、推量・推定を表す「にか」が認められた。

(33) さうあつたれども忠盛も御前ごぜんのことでわあつ、
しょう様やうさまもなうて、まだそのを遊びも過ぎなんだ
れども、面目めんもくなさに「かひそかにまかり出でらるる
とて、横たえてさされたかの刀を紫宸殿むらぎのどのの後でみ
な人の見るに、ある人にあづけをいて出られてご
ざつた。『天草版平家物語』P. 46)

(34) かなうまじいと、しきりに申されたれども、出
家入道しやうにんどうまで申したれば、それゆえにかしばらく、
宿所しゆくしよに置き奉れ、言われたれども、始終しじうしかるべ
からうとも見えぬ。『天草版平家物語』P. 40)
(35) その思いのつもりにか横笛よこふエわ奈良ならの法華寺ほふけにい
たがほどなう死した。

『天草版平家物語』P. 309)

(33)と(35)の「にか」は、「にかあらむ」の「あらむ」
部分が省略された可能性がある。つまり「にかあらむ」の

推量・推定の用法は『万葉集』以降、一時衰退したものが、
再び室町時代に用いられるようになったともいえるはな
い。しかし、清瀬(1982)序章の「付表」を参考にし、
『天草版平家物語』の原拠となったものと比較すると、

(34) かなふまじき由よし頼よりにの給たまはひけれ共、出家しやうまで申
たればにやらん、しばらく宿所しゆくしよにをき奉れとの給
ひつれども、始終しじうよかるべしとおぼえず。

『平家物語』覚一本 巻2 少将乞請)

(35) その思ひの積りにや、横笛よこふエ、奈良ならの法華寺ほふけにあ
りけるが。ほどなく死してげり。

『平家物語』百二十句本 巻10 第95句 横笛『新
潮日本古典集成』

(33) については対応箇所がなく、(34)「にか」(35)「に
か」においては(34)「にやらん」(35)「にや」が対応し
ている。つまり『天草版平家物語』における用例は、推量
を表す「にや」を口語調に翻訳したものである可能性が高
く、「にかあらむ」と直接つながるものではないと考える。

つまり、ニカーランと類似する推量・推定の用法は平安
時代以降、係助詞「か」の用法の変化と連動し、疑問詞を
伴う疑問の用法に変化している。

以上の結果から「にかあらむ」を出自とする場合、高知
県方言のニカーランは疑問表現に用いられることはないた
め、上代・平安時代に認められた推量・推定の用法が出自

と考えられる。この非常に古い用法が、辺境部ゆえに、衰退することなく高知県に残存し、さらに比況へも広がったと推測される。

しかしながら、いかに辺境部とはいえ、このような非常に古い用法が、高知県のみに残ることには疑問が残る。また、共通語の「ようだ」「みたいだ」のように、比況・様態から推量への用法の推移は考えられるが、推量から比況へ推移することは難しいように思われる。このように「にかあらむ」を出自とすると、いくつかの問題点が浮かび上がる。

三・二 に変わらぬ

次に、「に変わ(は)らぬ(ん)」(以下、「に変わらぬ」)からの変化を検証する。「変わらぬ」から推量・比況を表すニカーランに変化するには、「違いが無い」という意味(以下、意味を表す場合は「〇」を用いる)と関連させ、比況・様態表現として定着し、その後、推量、伝聞推量に用法を広げたという経緯が考えられる。そこで、現代語「変わらない」と前置する格助詞との関係を見てみる。

(36) 水は油に変わらぬ(ん)。(水は油(※)と違(が)ない／に変化しない)

(37) 水は油と変わらない(ん)。(水は油と違(が)ない)。
たとえば、(36)のように格助詞「に」を前置させた例文

では、文語などの場合を除き、「と違(が)ない」ではなく、「に変化しない」になる。「と違(が)ない」になるためには(37)のように格助詞「と」を前置させなければならない。この点で、現代語の語法と異なり、ニカーランが「と」ではなく、かならず「に」をとることは不思議に思われる。

しかしながら、現代語と現代語以前では「に変わらぬ」の意味は異なる。『日本国語大辞典』(以下、『日国』)では、

かわ・る かはる 【代・替・変・渝】《自ラ五(四)》(中略) ①(変・渝)(中略) ③物事と物事との間に違(が)がある。＊源氏(一〇〇一・一四頃)蓬生「大きな松に、藤の咲きかかりて、(略)風につきてさとにほふ香なつかしく、(略)橘にかはりてをかしければ」

とあり、さらに、『角川古語大辞典』(以下、『角古』)

かは・る (變・交・替) 動ラ四(中略) ⑤基準にするものと異なる。違(が)う。「おなじさまなる御心ばへを、世の人にかはりめづらしくもねたくも思ひきこえたまふ」(源氏・朝顔)「かくて明けゆく空の気色、昨日にかはりたりとはみえねど」(徒然・一九)「世の常の機(はた)の具足にてはわるく候。われわれが機の具足は、常のかはり候」(伽・蛤草子)「水吞む有様、舌の音して人に少しも替(かは)る事無し」(西鶴諸国咄・四・一)

とある。『角古』にある『西鶴諸国咄』の用例から考えると、少なくとも江戸中期頃までは肯定形「に変わる」に「と違う」という意味があったことがわかる。

具体的な用例を得るために、室町時代の口語を反映しているといわれる『虎明本狂言』にある「変わる」の用例を考察する。(用例後の括弧の中に池田・北原(1972、1983)における巻とページ数を付す。なお、関連する頭注がある場合はさらに付け加えた。)

「に変わる」で「と違う」という意味を持つものが認められた。

(38) われらが多をかくを御らんぜられ候ひつるが、
其内に、はたちばかりなる、いかにもうつくしき
上郎の、もたせられたるあふぎをさし出させられ
て、一ふでとおほせられし程に、かしこまつたと
云て、されゑをざつとかきしんぜたれば、みたに
かはつて見事やと仰せられし程に、

〔かなわか〕中296⑩ 頭注11 「あなたの風貌
からは考えられないほど見事だの意」

(39) されゑをかきてしんじたれば、御らんじて、さ
ても見事や、男ぶりにかはつて、見事やと仰せら
れ、〔かなわか〕中298⑮

(40) 人のひさうする花を、折て参て候が、はやたび
ゝ事にて候程に、折に参るはこは物なれども、

是はよの物にかはる程に、くるしう御ざ有まひ、

〔花盗人〕中380⑭ 頭注8 「花を盗むのは風
流心からで」他のものを盗むのとは違うから、さ
しつかえあるまい。虎寛本『余のぬすみとは違
う程に、くる敷うもあるまい
かと存る。』

(38) は「見た目と違う」(39) は「男ぶりと違う」(40)
は「他の盗みと違う」と解釈できる。また、「には変わる」
で「とは違う」という意味を持つものも認められた。

(41) /やいわ男、わらはが道具をとつたがよひか、
女じやと思ふたり共、よの女にはかはらふ、道具
をおこすまひか〔やせ松〕中294②

(42) 某が山のかみめが、身共にぞうぶんが有と申て、
此中いとまをこへども、常のわゝしひにはかはつ
て、某がためには一段とてうほうなもののにて候間、
いとまをいだし申さぬ所に〔いしがみ〕中232④

(41) は「他の女とは違う」(42) は「普段の口やかまし
いのとは違う」とそれぞれ解釈できる。「に」「には」以外
の前置する語を表3-2に示す。『虎明本狂言』では「に変わ
る」「には変わる」の形で「と違う」「とは違う」を表す
ものが表3-2のように13例(「に」9例「には」4例)認
められた。しかし、『虎明本狂言』においては、「に変わる」
の否定形「に変わらぬ(ない)」は認められなかった。

表 3-2 『虎明本狂言』分析

前置語	用例数
に	9
には	4
と	1
が	4
も	2
は	5
を	1
さらに	1
(なし)	3

狂言と同じく口語的性格を持つ抄物をみると、『蒙求抄』に「に変わる」の否定形が認められる。

(42) 昔ニカワラナントソ(『蒙求抄』五41ウ)

対応箇所は『蒙求』の劉玄刮席、「官府市里 不改於舊」にあたる。早川(1973)から対応箇所の訳を引用すると、「役所や町も元通りであつた。」とあり、(42)は「昔と変りがない」と解釈できる。

その他の文献を見ると、『宇治拾遺物語』に、(43)(44)「に変わらず」があり、(43)は「昔と違いがない」、(44)は「生きていたところと違いがない」と解釈できる。また、『徒然草』には(45)「に変わらぬ」があり、「昔と変りがない」と解釈できる。

(43) かたへ行て、さうぞきて、かぶとして出できたりけり。露むかしにかはらず。(『宇治拾遺物語』巻5-9 78)

(44) その母が夢に見る様、うせにしむすめ、(略)生きたりし折にかはらず。

(『宇治拾遺物語』巻13の7 167)

(45) 歌の道のみ、いにしへに變らぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへる同じ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。(『徒然草』第14段)

さらに、江戸時代の『好色一代女』に「に変わらず」が認められ、「着捨てたものと違いがない」と解釈できる。頭注24に「着捨てたような」ともあり、比況・様態的な用法といえる。

(46) 衣類は上代の嶋原大夫職の着捨し、物にかはらず、(『好色一代女』 頭注24「昔の島原。寛永以前遊郭が六条にあった頃の大夫が着捨てたような古風な着物。」)

このように、「に変わる」の否定形「に変わらず」「に変わらぬ」などの形で、「と違いがない」が認められた。も

ちろん、これらは現代語の「に変わらん」とは意味が異なるものである。つまり、(46)のような用法から、ニカランという連語(助動詞に準ずる)へ変化したと考えられる。また、連語として熟合したために「に変わらん」の意味が「と違いがない」↓「に変化しない」と変化した以後も残存したのであろう。

四 まとめ

ニカランには、比況、推量、伝聞推量の用法が認められた。現在、比況は衰退しつつあり、推量、伝聞推量が主要な用法となっている。

この用法の問題に出自の問題を加えて考えてみる。「にかあらむ」の推量・推定の用法(『万葉集』などで認められたもの)を出自とすると、推量・推定から比況・様態へ用法をひろげたが、再び推量(推量、伝聞推量)に戻ったという経緯を想定しなければならない。しかし、推量から比況への変化を表す用例が文献に認められず、推量から比況へ広がったという考え方は難しいように思われる。また、(47)のニモカランという文例が認められた。

(47) ヤッタニモカラン ヤランニモカラン

(娘は水疱瘡を) やったような気もする、やらなかつたような気もする／高知市50代女性↓筆者
古語に「にもかあらん」という形は想定できず、このこと

からも「にかあらむ」を出自とすることは難しくなってくる。

一方「に変わらぬ」を出自とすると、三・二で述べたように、文献に「に変わらぬ」の比況・様態的な用例が多く認められた。また、幕末の資料では諸星(1997)でも指摘されている『武市瑞山関係文書』の「ニカアラン」の用例が認められる(1例のみ)。

(48) 土屋ハ頗ル名人ニテ眞ニカアラン事ヲ云テ問ヒ
落ス由ニ付新小ヘヨク、申含ヲキ度候(元治元年八月下旬カ、(瑞山ヨリ獄外同志へ)) (『武市瑞山関係文書』一卷584頁)

武市瑞山は『高知県人名事典』によると、「武市瑞山(1829〜1865)土佐勤皇党盟主、通称半平太、本名小楯、瑞山は号、文政12年9月、長岡郡仁井田郷吹井村(高知市仁井田)に生まれる。」とあり、幕末の下級武士で、当時の高知方言の話し手であったと考えられる。

この用例の解釈として、高知県方言では、皮「カー」、川「カー」、側「ガー」と発音されるように、「カワ(変)ラン」が「カー(変)ラン」と発音されることもあり、「に変わらぬ」から変化したニカアランの長音の表記を「ア」で表したものと思われる。

さらに詳しくみると、(48)は様態の用法と考えられる(7)。また、現在では認められない連体修飾の形をと

るものである。しかし、『虎明本狂言』では「に変わる」の形で連体修飾のものが認められる。

(49) / 別にかはることがあらふか、思ひきつておと

びやれ (「とびこゑ」中 350 ⑦)

(50) ひとのひさうする花を、折て参て候が、はやた
びゝ事にて候程に、折に参るはこは物なれども、
是はよの物にかはる程に、くるしう御ざ有まひ、

(「花盗人」中 380 ⑭) (Ⅱ (41))

「に変わらぬ」の連体修飾の用例は得られなかったが、「に変わる」の否定形が連体修飾をとらない理由はなく、「に変わらぬ」の連用・連体修飾の形も、かつては、あつたと推測できる。

これらのことから、ニカーランの出自は「にかあらむ」ではなく、「に変わらぬ」と結論づける。つまり、用法の面では「に変わらぬ」が三、二で示したような経緯で比況・様態の連語として成立し、現在、推量及び伝聞推量に移行するとともに、比況の用法は衰退しはじめていると考えられる。同時に、連用・連体修飾の用法も衰退したのである。

この原因としては二、三で述べたように意味の類似するミタイナの影響が考えられる。ミタイナに押し出され、連用・連体修飾の場合が多い比況・様態の用法から、推量や伝聞推量に変化したと考えられる。

比況・様態から推量へ用法の変化(拡大)は、ヨーナやミタイナにも見られることで、ありうる変化である。桜井(1972)には、

推量の助動詞の消長を見ると、多くの場合、論理的・分析的な表現形式から情意的・融合的なそれへ、客観表現の語から主観表現の語へという方向性が見られる。また、一部には、広義の様態というべきものからやがて推量の意味を表すにいたる傾向がいちじるしい。そこには推量表現の本質の一面があると思われる。

とある。共通語では「ようだ」「みたいだ」、方言では九州の「如し」を出自とするゴタツ、などがそれにあたるであろう。特に長崎県の「ゴト」「ゴタル」については、愛宕(1983)で、『ゴト』『ゴタル』ともに、例示、比喩、推量、不確かな判断、願望などの諸用法がある。」とあり、様態的な用法から推量など多様に用法を変化させている。「に変わらん」から推量のニカーランへの変化と類似した例といえる。ニカーランもこの推量表現の普遍性に即した変化を遂げてきたと考える。

また、意味の類似するヨーナやミタイナと相補的な関係の構築などの要因も重なりニカーランの用法は現在に至ったと考えられる。

高知県方言は古語を残す方言とされ、ニカーランもその

代表とされてきた。しかし、これまで述べてきたように、ニカーランは高知県で独自の言語変化を遂げることにによって成立した表現形式であると考ええる。

おわりに

本稿では高知県方言におけるニカーランについて用法を記述するとともに歴史的変化を推定し、古語の「にかあらん」出自説を否定した。古態性を取り上げられることの多い高知県方言であるが、すべてにあてはまるわけではないことの一例となるのではないだろうか。

また、今後の課題として、なぜ、高知県だけで「に変わらぬ」がニカーランに変化したのかという疑問も残った。本稿はニカーランを中心に考察したが、高知県方言における、その他の文法や語彙の研究において、変化の独自性が同様に見いだせる可能性もある。そうすることで、高知県方言の新たな一面が見えてくるかもしれない。

最後に調査や談話の録音に協力していただいた話者の方々に心からお礼申しあげる。

なお、第75回日本方言研究会（2002年11月8日 於徳島大学）での研究発表では、佐藤亮一氏、篠木れい子氏、久野眞氏、高橋顕志氏、小林隆氏に貴重なご意見をいただいた。心からお礼を申しあげる。

注

(1) 土居 (1958) p. 225 には推量表現の項目に「ニカーランの形も推量を表す（中略）全果的に使用される。」とあり、比況表現の項目 (p. 252) には「マー サーツテ アシガ コーリノヨーナ（まあさわって御覧、足が氷のようだ）（この際アシガ コーリニカーランとも言う。）」とある。吉田 (1982) には「ちなみに、『あの山はまるで富士山のような。』という比況の表現にも『マッコト フジサンニカーラン。』のように、この形式があらわれる。」とある。

(2) 土居 (1958) には、「カーランは琉球方言にも存するが、意味用法が土佐のと違っているようである。」とあるが、文例は示されていない。真田 (1984) には比況の項目に「なお、高知にニカーランがあるが、沖縄の宮古島にもトゥカーランという表現形がある（『富士山トゥカーラン』。同系のものであろう。筆者はその原形は『に／と変らん』に求めるべきものと考ええる。」とある。これは、ニカーランに類似するが、ここでは一応、別形式とする。

(3) 『全国方言資料』収録日1956年1月22日 高知県香美郡美良布町 1871年生 男性

(4) 高木 (2001) でも、「筆者の観察ではニカーランは主節末で用いられることが多く思われるが、(20) (21) のように理由節や逆接の副詞節を作ることでもできる。しかし (22a)

のような連体用法はない。」

とある。(用例は省略)

(5) 古語の「にかあらむ」を出自とするものには以下のようなものがある。『高知県方言辞典』には、「にかーらん 連語(中略)(常に「に」という助詞から続いているところから考えると、古典語としての「にかあらむ」の系統をひいたものと見られよう。)」とあり、山崎(1961)には、「ニカーラン」は「にかあらむ」から変化したものと見られているが、今日では既に分析しがたいものとなっている。」とある。これに対して「に変わらぬ(ん)」を出自とするものには、土井(1935)に、「・・・かーらん(變らん) 動・・・の様だ・・・違いない。(後略)」とあり、金田一(1977)にも、「補注2) この言い方は、しばしば、古語の「するにかあらむ」から変わったなどと説明される。しかしスルニカーランというアクセントから見て、また、スルニのあとで、文節の切れ目が感じられることによって、「するに変わらん」の転であろうと解する。」とある。

(6) 文例(26)の校異について、田中(1956)を参照すると、三卷本系統(陽明文庫(舊二冊)本・宮内廳書寮部藏圖書寮本・陽明文庫三冊本・勸修寺家舊藏本・中邨秋香舊藏本・彌富破摩雄氏舊藏本・伊達家舊藏本・古梓堂文庫本・内閣文庫本・靜嘉堂文庫藏本)は内閣文庫本以外、疑問詞を伴わない「にかあらむ」である。対して、傳能因所持本系統(三

条西家舊藏本・富岡家舊藏本・高野辰之博士舊藏本・十行・十二行・十三行古活字本・慶安刊本)では三条西家舊藏本・慶安刊本以外は「何事(なにこと)にかあらん」であり、疑問詞を伴うものが多い。前田家本は「なに事かはあらん」である。ただし、文脈的には臨時祭りを「めでたきこと」と称える部分であり、疑問とすると内容が食い、疑問詞を伴わないほうが自然と考えられる。

(7) 諸星(1997)には、

ただ、この用例の場合は、他の箇所にも「村馬ガ云々ト云フ事ヲ真面目ニテイカニモ誠ラシク云タリ」(中略)とあるように、土屋が巧妙な審問技術で志士達を問詰するという情報を周知させるよう指示する文脈で使用されており、寧ろ様態を示す用法と思われる。

とある。

(8) 九州方言学会(1969) p. 86~87には九州全体に「様態の『ゴタル』」の分布が認められる。また、p. 188には「希望『ゴタル』(「老」)「少」両豊には少ない。他域には広く分布する。薩隅内にはゴチャル・ゴジャルが多い。対馬・屋久にはゴテアルがある。老少各層ともほぼ同様。」とある。

参考文献

- 愛宕八郎康隆 (1983) 「長崎県の方言」『講座方言学9』国書刊行会
- 池田廣司・北原保雄 (1972) (1983) 『大蔵虎明本 狂言集の研究』本文編上中下 表現社
- 江口正弘 (1986) 『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院
- 岡見正雄・大塚光信編 (1971) 『抄物資料集成』第6巻 清文堂出版
- 沖本樵児 (1981) 『渭南の言葉』自費出版 (編集者 沖本桃代)
- 北原保雄・村上昭子 (1984) (1985) 『大蔵虎明本 狂言集 総索引』1~8
- 清瀬良一 (1982) 『天草版平家物語の基礎的研究』三省堂
- 金田一春彦 (1977) 『日本語方言の研究』東京堂出版
- 九州方言学会編 (1969) 『九州方言の基礎的研究』風間書房
- 高知県人名事典編集会 (1971) 『高知県人名事典』高知市民図書館
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 国文学研究資料館 (2001) 『日本古典文学本文データベース』
<http://www.nijl.ac.jp/>
- 国立国語研究所 (1989) (2002) 『方言文法全国地図』第1~5集 財務省印刷局 (1~4集 大蔵省印刷局)
- 小松夏海 (2000) 「高知方言における断定の助動詞『ヤ』の優勢とその要因」『高知大國語国文』31号 高知大学国語国文学会
- 阪倉篤義 (1960) 「文法史について」『国語と国文学』昭35年10月号 至文堂『文章と表現』1975 角川書店 所収)
- 桜井光昭 (1972) 「推量の助動詞」『品詞別 日本文法講座』7 明治書院
- 真田信治 (1984) 「方言の助動詞」『研究資料 日本文法』第6巻 助辞編 (二) 助動詞 明治書院
- 柴田 武 (1976) 「標準語と方言」『朝日小事典 現代日本語』朝日新聞社
- 高木千恵 (2001) 「高知県幅多方言の『ニカーラン』について」『阪大社会言語学研究ノート』3号 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 田中重太郎 (1956) 『校本枕冊子』古典文庫
- 土居重俊 (1937) 「土佐方言語法 (下)」『方言』昭12年10月号 春陽堂 (『日本列島方言叢書21 四国方言考』1997 ゆまに書房 所収)
- (1958) 『土佐言葉』高知市立市民図書館
- 土居重俊・浜田数義 (1985) 『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団
- 土井八枝 (1935) 『土佐の方言』春陽堂

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（1982～1999）『角川古語大辞典』角川書店

日本国語大辞典第二版編委員会（2000～2002）『日本国語大辞典』第二版 小学館

日本史籍協会（1916）『武市瑞山関係文書』第一 日本史籍協会

日本放送協会編（1994）『全国方言資料』（CD・ROM版）

日本放送出版協会

早川光三郎（1973）『新釈漢文体系 第59巻 蒙求』明治書院
藤原与一（1974）『四国三要地方言対照記述』三弥井書店

（1996～1997）『日本語方言辞書』上中下巻

東京堂出版

松木礼子（2000）『幕末以降の土佐方言における意志表現・

推量表現形式の変化』『地域言語』第12号 地域言語研究会

松岡 司（1978）『武市瑞山関係文書補遺』『日本歴史』19

78年5月号 吉川弘文館

松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』 紀元社

松村 明編（1969）『助詞助動詞詳説』 学燈社

水原一校注（1979～1981）『新潮日本古典集成 平家物語』新潮社

室町時代語辞典編集委員会（1985～2001）『時代別国語大辞典 室町時代編』1～5巻

諸星美智直（1997）『武市瑞山文書から見た土佐藩士の言語

について』『国語学』191集 国語学会

山口明徳・秋森守英編（2001）『日本語文法大辞典』明治書

院

山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』 明治書院

山崎良幸（1961）『方言の実態と共通語化の問題点 11 高知』

『方言学講座』第3巻 東京堂出版

湯沢幸吉郎（1929）『室町時代の言語研究』 大岡山書店

横井真紀子（1981）『高知県中央部方言における推量表現』『高

知女子大國文』17号 高知女子大学国語国文学会（『日

本列島方言叢書21 四国方言考①』1997 ゆまに書

房 所収）

吉田則夫（1982）『高知の方言』『講座方言学8』国書刊行会

そのほか『岩波日本古典文学大系』の『万葉集』『古今和歌集』『枕草子』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『宇治拾遺物語』『徒然草』『好色一代女』から用例を引用した。

（やすおか・こうじ 平成十四年度修了生

高知商業高等学校教諭）